８俳懺悔（大江丸）

たくさんの

下男

初と相よし。しかるに蝶ゆゑありて公の罪をかうむりの島に流さａるるに、友人これかれ別れををしみ、舟場までおくりて、信友の情をなす。一蝶申しけるは、かかる身のふたたび相見む事かたし。これまでの御懇情いつの世にかは忘れ申さむ。我かの島の事を聞くに、大かたの人、魚をとり日にほし乾かして、江戸の便にひさぐと承る。  
 ①我もまたさこそあらめ。しからば魚のに木の葉やうの物を、すこしづつ入れおくｂべし。もし、さやうのものの入りたるあらば、蝶がなせるものよと思ひたまへかしと言ひて別れたり。人々その舟かげの見ゆるまで見おくり、其角は②いとどむねふたがりて、③立ちも去らでありし。その後ひととせばかりありて、其角が僕、日本橋の魚の店にて、乾魚の有りしをととのへかヘり、かてぐさになさむと、たわわなる魚を火にあぶりけるに、むろといへｃるの中に、ささの葉のやうの何とも知れがたきが一枚でたり。のこる魚どもにも各おなじやうにありしゆゑ、さてさて島のやつらは、をかしき事をなすなりと笑ふを、其角ふと寝耳に入り、④やをら起きあがり、蝶がいひし事を思ひ出だし、この乾魚はいづかたの島よりまゐりしものかと、そのひさげる問屋へ人走らせてたづねけるに、大かたは八丈大島よりわたし申すよしを申す。角ここにおいて、⑤蝶がいひしを思ひ、の情しきりにうごき、蝶がしたしかりし友どちをあつめ、茶を申し入れ、この干魚を出だし、これこそ蝶が申しのこせしかたみなれ。いまだながらへて、⑥かかるわざをなしけるよと、みなみなそなたのかたに向きて、はるかに信友の情、今更涙とどめかねたりしとぞ。

なんとまあ

一年

売る

事情があって

語注

＊一蝶…。江戸中期の画家。伊豆島に流された。

＊其角…。第一の高弟。「」「」などがある。

＊伊豆の島…現在の伊豆諸島のこと。三宅島や八丈大島も含まれる。

問１　＝　線部ａ〜ｃの助動詞の意味をそれぞれ次から選び、記号で答えよ。

ア　意志　　イ　完了　　ウ　尊敬　　エ　受身

ａ＝（　　　）　　ｂ＝（　　　）　　ｃ＝（　　　）

問２　――線部①、③を現代語訳せよ。

①＝〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 〕

③＝〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 〕

問３　――線部②、④の意味として最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号を○で囲め。

②　ア　とても　　　イ　まったく　　　ウ　いっそう　　エ　なんとなく

④　ア　すぐに　　　イ　おもむろに　　ウ　しきりに　　エ　うれしそうに

問４　――線部⑤の要点が書かれている、連続する二文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問５　――線部⑥について、一蝶は何のためにこのような行為をしたのか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　突拍子もないいたずらをして、友人たちを驚かせるため。

イ　親しい友人たちに新鮮でおいしい魚を食べてもらうため。

ウ　島に古くから伝わる風習を絶やすことなく守っていくため。

エ　自分が生きていて、友のことを思っていると知らせるため。

問６　文中から読み取れる其角の人柄として、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　他人の言うことをすぐに信じてしまう素朴な人。

イ　友のためならどんなことでもやりとげる義理堅い人。

ウ　友人をいつまでも忘れず気にかける情に厚い人。

エ　物事の善悪をはっきりさせようとする正義感の強い人。

【解答】

問１　ａ＝エ　ｂ＝ア　ｃ＝イ

問２　①私もまたそのように（生活）するでしょう

　　　③立ち去りもしないでいた

問３　②＝ウ　④＝イ

問４　しからば魚

問５　エ

問６　ウ

現代語訳　初代一蝶は、其角と仲がよかった。けれども蝶が事情があって公の罪をこうむり、伊豆の島に流されるというので、友人のこの人あの人が別れを惜しみ、舟場まで送って、真の友情を確かめ合った。一蝶が申したことには、「このような身で再び会うことは難しい。これまでの御懇情はいつまでも忘れません。私があの島のことを聞いたところ、だいたいの人が、魚をとり日に干し乾かして、江戸まで運んで売るとお聞きしています。私もまたそのように生活するでしょう。そうであるならば魚のえらに木の葉のようなものを、少しずつ入れておきましょう。もし、そのようなものが入った乾魚があれば、蝶が作ったものだなとお思いなさってくだされよ。」と言って別れた。人々はその舟の姿が見えるまで見送り、其角はいっそう胸がいっぱいになって、立ち去りもしないでいた。その後一年ほど経って、其角の下男が、日本橋の魚の店で、乾魚があったのを買って帰り、食糧などにしようと、たくさんの魚を火にあぶったところ、ムロといった干魚の中に、ささの葉のような何とも理解しがたいものが一枚出てきた。残りの魚にもそれぞれ同じように入っていたので、なんとまあ島のやつらは、おかしなことをするものだと笑うのを、其角はふと寝耳に聞き、おもむろに起き上がり、蝶が言ったことを思い出し、この乾魚はどちらの島から参ったものかと、その売った問屋へ人を走らせて尋ねたところ、大方は八丈大島からお渡し申し上げたことだと申し上げた。角はそこで、蝶が言ったことばを思い、朋友の情にたいそう心が動き、蝶が親しかった友人を集め、茶を入れ申し上げ、この干魚を出し、これこそ蝶が申し残した形見である。今でも生きながらえて、このようなことをしたのだなと、全員がその（＝八丈大島の）方を向いて、はるか遠くにいる親友の情に、今改めて涙をとどめることができなかった、ということだ。

ポイント

問２　①島では「大かたの人」が「魚をとり日にほし乾かして、江戸の便にひさぐと承る。我もまたさこそあらめ。」→「こそ〜め」は、係り結び。「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「そのようであるだろう」が直訳。

　　　③「立ちも去らでありし」の「で」は、「〜ないで」の意。「し」は過去の助動詞。